

西洋文化史演習 I レポート講評

レポートの最初の課題は「グリム童話で知っているお話しのタイトルをひとつだけ書いてください。」というものであった。ひとつだけにタイトルを絞ったのは何が受講生にとって印象にも最も強く残っている話しなのかを知るためであり、その話しの系譜を絞り込むためでもあった。最も印象が強く残されているお話しは「赤ずきん」であった。50人中18人が「赤ずきん」を挙げていた。次いで多いのが「シンデラレ」であり、12人が「シンデラレ」を挙げていた。問題はグリムでのタイトルは「シンデラレ」ではなく「灰かぶり」などで多くはディズニーのアニメーションか、ペローの話しと混同して記憶しているのだろう。次いで多かったのが「白雪姫」であり6人が「白雪姫」を挙げていた。4位以下を列挙しておこう。4番目が「ヘンゼルとグレーテル」、5人。5番目が「ハーメルンの笛吹き男」、4人。6番目が「青ひげ」、2人。7番目が「ラプンツェル」、「ルンペルシュティルツヒェン」でそれぞれひとり。タイトルを忘れたという人もひとりいた。

ここから分かるのは受講生が最もよく知っているグリムのお話しはマリーを含むハッセンプフルーク家の姉妹から兄弟が採録したものだという点である。そしてこれらは兄弟よりも150年ほど前に刊行されたペローの『寓話』をベースにしているお話しである。つまりドイツの農民の間で語り継がれてきた民話ではなく、フランス語で書かれた刊本を基にしているという点に注目される。多くの研究者によって既に指摘されていることだが、私たちがよく知っているグリムのお話しはドイツ起源ではなく、農民の間で語り継がれてきたものでもなく、フランス語で記された書物を通じて都市に住む名家の教養ある女性たちのサロンに起源を有している。

この事実を踏まえて3番目の課題につながっていく。『グリム童話』は中世史を研究する際に史料として有効かどうかについて受講生の意見を求めた。その結果は極めて興味深いものであった。YESとNOが相半ばしているのである。厳密に言えばYESが24人、NOが26人である。しかしほとんど半々であることに間違いはない。

そこで最後にYESあるいはNOと判断した理由を受講生に書いてもらった。YESと答えた学生が理由としているのは「森」「おおかみ」「盗賊」という言葉である。何れも『童話』では人々の恐れの対象であり、ヨーロッパの中世を象徴するものであると評価している。お話しの個々の事件や出来事は事実ではないとしてもその背景にある環境は中世の記憶に根差しており、その意味において史料として有効であると言うのである。それは近代においては「森」は縮小し、「おおかみ」は絶滅し、「盗賊」は姿を消していたという見方が肯定的評価の背後に働いているのであろう。しかし近代といっても時間幅が広いということを考慮しなくてはならないだろう。16世紀や17世紀はどうなのだろうか。

NOと答えた学生の多くがその根拠として『童話』においては「脚色」され「物語化」されていて正確ではないという点を挙げている。さらにお話しの舞台が時代や場所を特定化するのが困難で、史料として扱うには不適切だと学生たちは評価している。お話しの世界は

「作り話」や「空想の産物」、つまりファンタジーに過ぎないというのが学生たちの判断である。しかし本当に史料として無価値なのか、もう少し検討してみる必要はあるように思われる。古くから世界の様々な地域でよく似た話が語られ、文字に記録されてきたのは何故かを考えてみる必要はあろう。親や祖父、さらには親族が子供を殺そうとする話はそれこそヘロドトス以来多く記されて来ているし、子供を捨てるという話も古くから洋の東西を問わず語られ続けている。

その上で『グリム童話』を中世史の史料として使えると判断している学生に注文しておきたいことがある。史料として使おうとしているテキストは何なのかをよく考えて欲しい。それは子供向けのいわゆる「小さな版」なのか、エーレンベルク稿なのか、初版なのか、それともヴィルヘルムの手が多く入った第 7 版なのかを見て欲しいということである。次いで邦訳の出ているレレケ（ハインツ・レレケ（小澤俊夫 訳）『グリム兄弟のメルヒェン』岩波書店、1990 年）などの翻訳や日本人研究者の論文（相澤啓一「物語欲求」が生み出す歴史とネーション：グリム童話が創作したもの」、*Rhodus: Zeitschrift für Germanistik* 21, pp.73-99, 2005 他）を読んだうえで文献学的な考察を加えておく必要がある。そして『童話』から利用しようとする事件や状況が確実に中世に限定し得るのかどうかを考察して欲しい。「森」・「おおかみ」・「盗賊」は中世に存在したが、中世にだけ存在していたわけではない。例えば狼はイギリスでは 17 世紀後半まで存在していたし、ドイツやフランスではそれぞれ 35 頭と 100 頭という数字ではあるが、保護されている。「盗賊」は中世に存在しただろうが、近代においても存在している。

史料として使えないと答えた学生には阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』（平凡社、1974 年／ちくま文庫、1988 年）を読んで欲しい。阿部氏はグリムのお話しを出発点として過去にさかのぼり、ドイツ東方植民説を批判して退け、終に 1284 年 6 月にハーメルン市で生じた事件、子供たちが行方不明になったという事件にたどり着いたのである。それと同時に都市に所属しない遍歴の職人たちに対する差別、14 世紀に突然現れたクマネズミの群れなどが説話形成の過程で接合されたと論じていることを思い起こす必要がある。むしろ童話をどのように扱うのか、あるいは扱えるのかが問題となるように思われる。